

漫画「この世界の片隅に」を読んで A cartoon "in the corner of this world" was read

なかはら かせ

キーワード：漫画、世界観、作家論、作品論

「この世界の片隅に」

日本中の多くの人たちが、なんらかのメディアでこの作品を鑑賞していると思います。ある人は漫画版で、劇場でアニメーション版を観た人、最近ではTBSの日曜劇場ドラマ版を感動をもって観たことでしょう。

また、観ていなくてもタイトルだけは知っている人も多いのではないのでしょうか。

漫画家のこの史代さんの描かれた漫画作品で、2007年から2009年まで、双葉社の漫画アクションに掲載されました。コミックスになった当時から根強いファンは多かったと聞きますが、多くの人に知られるきっかけとなったのは2016年に片渕須直監督による劇場版アニメーション「この世界の片隅に」でしょう。累計動員数は209万人、興行収益は27億円といわれています。テレビアニメーション化されるのではという憶測もありましたが、TBSが日曜劇場で実写化したのには驚きでした。2011年に日本テレビも実写ドラマ化していますが、原作とは大幅に違う演出構成になっており、今回のTBSドラマ版の方がかなり原作に近いイメージで製作されていました。

まずは原作の漫画版から説明をしましょう。漫画家のこの史代さんは東京での漫画家生活の後、現在は京都在住ですが、「この世界の片隅に」の舞台となっている広島市の出身です。「この世界の片隅に」に先立つ2004年に執筆発表された「夕風の街 桜の国」という作品で、第8回文化メディア芸術祭マンガ

部門の大賞を、また第9回手塚治虫文化賞新生賞を受賞されています。この作品が代表作として大きな反響を呼びました。

スクリーントーンを使わない手描き感のある画風で表現された物語は、やわらかくほのぼのとした雰囲気と世界観をもっていますが、「夕風の街 桜の国」という作品は、広島に原子爆弾が投下されて10年経ち、また40年後や60年後の様子を描いています。原爆による被爆の様子、後遺症による苦しみ、生き残った者たちの心の葛藤や偏見などを正面から描いているのです。見た目の絵柄とは違って強いメッセージが感じられる作品です。

広島の前爆投下をあつかった作品は「はだしのゲン」が有名です。漫画家の中沢啓治さんによる自伝的作品です。自身が被爆者であり、その経験を元にリアルに現実の惨状を描いてあります。広島では平和教育のtextとしても使用されたこともあり、表現がリアル過ぎることから教育委員会や学校現場で問題視されたこともありました。被爆者を扱うことは、多くの読者のことを考えると、その中には感性豊かで感受性の鋭さから影響を受けやすい子供たちもいれば、実際の被爆者の方々やその関係者が多くおられるなど、色々な立場の方々があります。公開するにあたっては、そのようなデリケートな問題にも関わってくるのです。

この史代さんの「この世界の片隅に」は、広島と呉を襲った戦争の悲劇の最後として、原爆投下がエピソードのひとつとして描かれています。直接被爆者がテーマの作品ではありませんが、当時の戦時下の人たちの生活をそのまま描いていることでは「はだしのゲン」と同じく、リアルな物語だと言えるでしょう。アプローチの違いが作品のイメージを大きく左右する漫画では、漫画家の描く世界観がいかに重要かがよくわかります。それは読みやすい、とか読みづらい、といったアプローチではなく、作品の内容が絵柄によってそのイメージがまったく変わってしまう漫画作品の場合、キャラクターデザインや背景の描き込み方、コマ割りのセンスなど、目に見えるビジュアルにたいへん影響さ

れやすいメディアであるからです。こうの史代さんの絵柄のほのぼのとした絵本のような入りやすさも、この作品のメリットであったと推測されます。

こうの史代さんの「この世界の片隅に」には、双葉社から上中下の3巻で発売されています。このコミックスは2008年から2009年にかけて発売されました。10年も前の作品ですが、当時はわたしもこの作品をまったく知りませんでした。大学の講義ではマンガの歴史を勉強しながら、社会的に影響を与えた作品についても取り上げています。しかしながら、「この世界の片隅に」については、まったく守備範囲外でした。世間的な評価はべつにしても書店にいつも潤沢に並んでいる漫画作品ではありませんでした。やはり、再び注目を浴びるきっかけになったのは、片瀬須直監督による劇場版アニメーションの影響に寄るところが大きいと感じるのです。漫画版もアニメ版も、TBSドラマ版も共通して原作どおりに広島の方言が使われています。方言を使うことでローカル感もですが、生活感も現れてきます。また、広島という言葉が温かく、親しみがわくのは、山口県という言葉にも似ているためでしょうか。

こうの史代さんのコミックス「この世界の片隅に」は、実は大きく4つの物語から成り立っています。このコミックス「この世界の片隅に」は、それを3冊にまとめられています。主人公すずさんの子どもの頃、昭和9年、昭和10年、昭和13年が舞台となった最初3話までがまず描かれています。

1話「冬の記憶」昭和9年1月。

2話「大潮の頃」昭和10年8月。

3話「波のうさぎ」昭和13年2月。

4話「この世界の片隅に」昭和18年12月から、最終話が昭和21年1月まで。

この4話目の「この世界の片隅に」は45回ありますが、すずさんが縁談話があるところから始まり、結婚してお嫁に行く話になっています。そして、戦争が激化して、やがて終戦、戦後までが描かれています。

「この世界の片隅に」が評判となり、多くの人たちが鑑賞して、多くの評価や感想、分析がされてきています。作品をどのように感じるかは個人の感性や趣味志向に関わってくるからです、まとめることは不可能だと思います。しかし、漫画家という同業の者として、またこの史代さんと絵柄や表現手法が似ているタイプの作家として、少しこの漫画のもっている表面的な面白さやメッセージ性だけではなく、根底に流れるゆるやかな伏流水のようなテーマを探ることが出来ればと思っています。

すでに読んでおられて内容を理解されている方もおられるとは思いますが、簡単に物語の流れをまとめてみます。そうすることによって、絵本のようにゆるやかに語られる物語のアウトラインが理解できるかと思っています。

物語の舞台となっているのは広島県の海軍の町であった呉。呉はアメリカ軍の激しい空爆によって焦土となった町です。

「浦野すず」という少女が主人公です。4話目以降は結婚して「北條すず」と名前が変わります。すずさんは性格的にはおっとりとした、のんびり暮らしている少女です。物語は1話「冬の記憶」、2話「大潮の頃」、3話「波のうさぎ」の3つのお話が少女時代のエピソードとなっています。結婚するまでのすずさんは、昭和9年頃（アニメ版では昭和8年）の広島市内の江波（えば）で暮らしており、江波地区は広島市の南端にある海に面した地域です。すずさんが家業の海苔梳きを手伝わされていることからわかります。現代では埋め立てられ工場地帯となり、海苔養殖業も少なくなったと聞いています。爆心地から近く甚大な被害を被った地域でもあります。

「冬の記憶」は、そのすずさんが9歳（アニメ版では8歳）、海苔を中島本町（現中島町）へ届けるためにお使いに出る短編です。中島町は平和記念公園の近く、広島市の中心にあたります。子どもにはかなりの距離を行くお使いです。この12ページの短編で重要なのは、主人公のすずさんのキャラクター設定がしっかりされているということです。ぼーとして頼りない少女ですが、心の強さ

を持っていて、何事にも諦めず一生懸命に前を向いて歩く性格だということが読み取れます。この大人しく見えて、激しいところも持つ性格は以降の物語でも、とくに戦時下や戦後の苦難に遭遇したときに、その性格がすすさんを助けるのです。

そしてもうひとつは、将来の夫となる北條周作さんとの出会いです。子どもの頃に何かしらの縁で出会ったふたりが、大人になっての邂逅。恋愛物の定番とも言える設定ではありますが、この自由恋愛が珍しかった時代に縁談話として邂逅をもってくるのは、ほのぼのとした雰囲気 작품을与えていると思うのです。加えて、この短編にはファンタジー要素が少し振りかけてあります。以降の作品ではむしろ、現実的な状況に直面することが多いだけに、この中の人さらい、人買いのエピソードは不思議な世界観を持っています。それだけに、短編でありながら印象深い話になっています。すすさんがお使いに行き、周作さんと会うだけの話では、力不足であつたでしょう。人買いのエピソードが現実だったのか、夢だったのかわかりませんが、子どもの頃によく経験するこのような曖昧な記憶が誰にもあるはずで、夢以上に現実的な夢が、漫画表現のひとつの手法だとすれば、この1話目の短編はシリーズ全体のカラーを決めるにふさわしい短編だと言えます。

2話目の「大潮の頃」は、16ページのやはり短編です。江波から西へ少し離れたところに草津という地域があります。漁港があり広島市中央卸市場がある地域でもあります。10歳になったすすさんが草津に住む祖母の家を訪ねる物語です。ここで初めて兄の要一さんと、妹のすみさんが登場します。TBSドラマ版では「冬の記憶」のお使いのシーンから兄妹は登場しますが、アニメ版では漫画版に近い導入として2話目からの登場になっています。また、TBSドラマ版はすすさんが戦争に行った兄の要一さんに、独り言のように報告する設定となっており、ナレーションの役割も含んでいて物語をわかりやすくしています。兄の要一さんは怖いしっかりとした兄として描かれています。また、妹のすみさんは器量の良いすすさんよりも美人として設定されています。そして重要な

のはこの短編でも伏線があり、座敷童（ざしきわらし）が登場するのです。1話目の人買いと同じファンタジーと思いきや、実はこの座敷童には秘密があり、後のエピソードの中で描かれています。

3話目の「波のうさぎ」も17ページの短編です。12歳、6年生なったすずさんの家が海苔梳きを家業としていることが説明されていますが、むしろこの3話目でもっとも重要な部分といえば、すずさんが絵が上手であることが語られているところでしょう。そして、やはり「この世界の片隅に」という物語には欠かせない登場人物のひとり、腕白坊主の水原哲さんの登場です。水原さんの役割は極めて重要です。すずさんが子どもの頃からの幼馴染みで、水原さんは兄を海難事故で亡くしています。そのために家庭が荒れて、暴れん坊のすさんだ性格になったように描かれていますが、実は非常に寂しがり屋で本当は他人に対してやさしい心を持っていることがわかります。戦争に巻き込まれていく登場人物のひとりとも言えるでしょう。

その水原さんが苦手な課題の絵を、すずさんが代わりに描いてやることで、それをきっかけにふたりは少しわかり合えるのです。

この3つの物語は

「冬の記憶」月刊まんがタウン 2006年2月号

「大潮の頃」漫画アクション 2006年8月

「波のうさぎ」漫画アクション 2007年1月

に掲載されました。こうして見てみると、もちろん登場人物が浦野すずであるとはいえ、独立した読み切り作品として描かれた様子がよくわかります。9歳から12歳までのすずさんの広島市江波での生活が描かれています。

昭和6年の満州事変、昭和12年の日中戦争を経て、昭和16年の真珠湾攻撃にみる太平洋戦争へと坂道を転げ落ちていく時代です。軍部が国政を掌握し、厳しく制限された庶民の生活が始まっていきます。その戦争の影が色濃くすずさんたちの上に覆い被さってくるのは、4話目の「この世界の片隅に」からで

す。上記の3作品にはまだきな臭い匂いは漂ってはいません。そういう意味では、やはり読み切りと、4話目以降の連載形式とでは少しテーマが違っていることがわかります。この3作品は広島でのすずさんたちが子どもの頃の生活が、ほのぼのと描かれているわけです。こうの史代さんが、4話目からのすずさんが大人になってお嫁入りする展開を、あらかじめ考えてこの読み切り3話を描かれたのかはわかりませんが、実はこの3話の物語には説明したように伏線がたくさん仕掛けられています。ある程度の物語としての流れ、ロードマップとしてのすずさんの人生を、こうの史代さんはあらかじめ考えられていたようにも思えます。太平洋戦争が終わり、戦後のもっと厳しい時代を迎えるまでの大きな時代のうねりを描きたいと思われたのは確かではないでしょうか。

こうの史代さんの別の作品に「夕風の町 桜の国」があります。2003年から2004年にかけて双葉社の漫画アクションに掲載された作品です。冒頭に説明したように、この作品は広島原爆投下と、被爆の歴史を直接テーマとしています。こうして描かれた作品とは別に、こうの史代さんはむしろ戦争そのものを庶民の生活の中から描いてみたい、と思われたそうです。原爆や戦争を直接描くのではなく、むしろ人々の日々の生活の中から浮き彫りに出来る戦火があるのではないか、そんな意図があったのでしょうか。

わたしは漫画を描くときに、担当編集者から必ず言われることがあります。「どこかストイックな面を持った主人公でなければならない」「ちょっといい話とといったものにはしない」この2点を注意されます。確かにわたしの作品は、のんびりした主人公が何気ない日々の中で起こるであろう、ささやかなドラマを描いたものであり、悪人が登場しません。そのことがわたしの作品の個性だとわかった上で、担当はあえてそう注文をつけるわけです。作品の個性はその作家の素晴らしい一面ですが、雑誌社とすれば、
「人気があり、売れる作品」

という要素も重要だということなのです。作家はその両面をしっかり持っていることが条件だということでしょう。どんなに絵が上手くても、物語が個性的であっても、多くの読者に受け入れられなければ、プロフェSSIONALではないということなのではないでしょうか。

双葉社の編集担当者がこの史代さんに、広島出身ということもあってか原爆をテーマに描いてみれば、とアドバイスしたとも聞いています。もちろん書いたとおりにすでに「はだしのゲン」という作品がすでに惨状を伝えた漫画として存在していました。あえて今またこの史代さんに編集者がそのような重いテーマを要求したのでしょうか。まさにストイックなテーマであり、メッセージ性の強い作品になるでしょう。誰にでも描けるテーマではないし、反戦的なもの核反対という幟を掲げたものになる可能性もあるのです。その点では「はだしのゲン」はテーマにあった中沢啓治さんの絵柄といえます。「夕風の町 桜の国」のこの史代さんの絵柄はどこまでもやさしく、ほのぼのとした雰囲気があります。「この世界の片隅に」でも同じことがいえます。ではなぜ、担当編集者はほのぼのとしたこの史代さんに、このような重いテーマを提案したのでしょうか。それはむしろ、やさしい絵柄だからこそスムーズに伝えられる物語だってあるからです。

私の場合はやさしい絵柄でちょっといい人たちの物語を描いて、没となりました。薄墨でやさしい絵を描くのに似ています。薄墨で描けば重いテーマも、きっと抵抗なしに読者に受け入れられるでしょう。直接悲惨な状況をダイレクトに表現しなくても、戦時下の、また原爆投下後の広島を、人々の日々の生活から描き起こすことで抵抗なく表現できるのではないのでしょうか。それが薄墨という、この史代さんの個性だったのかもしれませんが。つまりは、カメラをどこに向けて表現するのか。テーマを表現するために軸足をどこにおいて表現するのか。このことを突き詰めていくと、この史代さんの「この世界の片隅に」という作品が大きな意味をもってくるのがわかるのです。

最初の3作品は、まだ戦争の直接の影響はないものの、忍び寄る大日本帝国の影がやがて、主人公すずさんたちの上に重い影を落としそうな予感を感じさ

せながらも、それでも一生懸命に毎日を生きている浦野家の人々が描かれているのです。

冒頭部分でこれから始まる物語に続く、必要な要素を説明するのが物語作りの基本と言われます。みなさんがよくご存じの、壮大な宇宙を舞台に繰り広げられる伝説的物語「スターウォーズ」があります。1977年に公開された、第1作目（エピソード4）、現タイトルは「スターウォーズ エピソード4/ 新たな希望」。この初めてスクリーンで観た壮大な物語と特撮（まだCGはありません）の素晴らしさに感動した思い出があります。当時、しばらくしてビデオ化され100回以上は観たでしょうか。ご存じの方も多いことだと思います。

このスターウォーズの冒頭場面が素晴らしいのです。内容説明はしませんが、帝国軍と反乱軍、お姫様と護っているロボットたち、宇宙空間でのバトル、やがてある星への脱出、その星にはひとりの青年が住んでいました、とテンポ良く続きます。そこまでがおおよそ15分程度の展開です。そして、その青年が登場した時に、静かにBGMとしてスターウォーズのメインテーマがやさしく流れます。この青年が主人公なのだと、観客に知らせるかのように……。

つまり、冒頭でこれから始まるわくわくする世界観をしっかり説明しているのです。観客はもはや逃れることは出来ずに、監督ジョージ・ルーカスの手のひらに乗せられてしまっているのです。

「冬の記憶」「大潮の頃」「波のうさぎ」の3作品、計35ページは、4作品目の連載版「この世界の片隅に」計384ページと比べると、まさに連載版を本編とすれば、アバンとも言える35ページとなり、冒頭場面で世界観を知らせるための重要なパートと考えられるのです。しかも、3作品が続けて掲載されたわけではなく単独発表だったことを考えると、こうの史代さんが大きな構想・プロットとしてこの物語全体を当初から企画されていたことがうかがえます。この35ページがあるからこそ、それに続く384ページがあり、全体で419ページの完結した物語として、わたしたちに感動を与えるのだと思うのです。

連載版「この世界の片隅に」は昭和18年12月から、最終話が昭和21年1

月までが舞台となっています。45話から成り立っています。浦野すずさんは18歳となり、時代は昭和16年12月に真珠湾攻撃が行われ、太平洋戦争に突入していました。戦時下の広島市の江波、祖母が住んでいる草津、そしてお嫁に行く北條家のある呉市が主な舞台となってきます。

1回目(上巻)

18歳になったすずさんは、祖母のいる草津で家業の海苔梳きを手伝っていました。そこにすずさんの縁談の話が飛び込んできます。相手は呉からやって来た北條周作という人でした。この時に海軍に入っていた幼馴染の水原哲さんに偶然再会します。

2回目

すずさんの北條家へのお嫁入りと祝言が描かれています。

3回目

嫁としての生活と仕事が描かれています。ぼんやり、ぼーとしたすずさんの新しい家での生活です。

4回目

北條家のまわり、隣組の人々が紹介されています。

5回目

周作の姉の黒村径子さんが娘の晴美さんを連れて、北條家に戻ってくるエピソードです。すずさんの頼りない様子にいらいらがつのる径子さんですが、晴美さんはすずさんに懐くのです。

6回目

すずさんの里帰り、従軍している要一兄さんや、妹のすみちゃんの女子挺身隊のことが語られています。戦時下の市内の様子も描かれています。

7回目

ストレスから円形脱毛症になるすずさんですが、周作さんとの畑での会話がほのぼのとしていて、初々しくもあります。呉の軍港を見下ろすと戦艦大和が入港してくるシーンもあります。

8 回目

番外編のようにすずさんが語る戦時下の台所事情と料理などの説明があります。漫画で見ると当時の様子がよくわかります。

9 回目

北條家のお母さんと配給をもらいに行くお話ですが、道すがら北條家のたいへんだった頃の話の聞きすずさんです。戦時下の今に比べれば、たいへんだった時代ですら懐かしい、そんな言葉も出てきます。

10 話目

径子さんに言われて小松菜を育てますが、その径子さんはちゃっかり離縁して、晴美さんを連れて帰って来ます。建物疎開のことも説明されています。

11 話目

空襲・空爆の恐れもたかまり、防空壕を作る話です。周作さんとすずさんの仲の良さも語られています。

12 話目(中巻)

絵の上手なすずさんが畑から呉の軍港を描いたために、憲兵に叱られるお話です。自由に絵も描けない時代です。

13 話目

すずさんが、うっかりお砂糖壺を水がめに落としてしまい、闇市に買いに行くお話ですが、帰り道がわからなくなってしまう。

14 話目

迷い込んだのが遊郭街でした。そこで重要な人物のひとり二葉館の遊女の白木リンさんと運命的な出会いをします。アイスクリームのことを知ります。

15 話目

周作さんが忘れ物をしたと、すずさんに呉市内まで持って来させますが、それは口実で周作さんが久しぶりにすずさんとデートするために仕込んだ作戦でした。

16 話目

遊女の白木リンさんに絵を届けます。その時にある男の人に描いてもらった名札をすずさんに見せます。病院で診てもらったすずさんは、妊娠ではなかったことがわかります。悩むすずさんにリンさんが言います。

「誰でも何かが足らんぐらいで、この世に居場所はそうそう無うなりゃせんよ」と、そんな言葉で励まします。

17 話目

親戚が空襲に備えて荷物を預かってくれと、北條家へやって来ます。蔵を掃除していたすずさんは、そこでリンドウの花の茶碗を偶然発見します。周作さんはいずれ嫁に来た人にあげるつもりで買っていたと、すずさんに言います。

18 話目

晴美さんと一緒に竹林で作業していたすずさんは、リンドウの花を見つけて見つめているうちに、ふと周作さんとリンさんが関係があるのではないかと気づきます。ふたりを結びつける共通の条件が多くあったのです。

19 話目

すずさんは炭の代用品である炭団を作りながら、自分はリンさんの代用品ではないのかと哀しくなります。周作さんに打ち明けることなく想いを飲み込んでしまいます。

20 話目

カルタ形式のように、いろいろな人の投稿コメント風に、戦時下の人々が説明されています。戦時下の生活はますます不自由となり、端切れや着物をばらして普段着に作り替えることが説明されています。

21 話目

幼馴染みの水原哲さんが、突然北條家を訪ねてきます。海軍の船から1日だけの上陸許可が出て、すずさんに会いに来たのでした。周作さんは納屋に泊めた水原さんのところへ、すずさんを行かせます。久しぶりだから、ゆっくり話してこい、ということでした。

22 話目

水原さんとすずさんとの一晩の心の交流が描かれています。明日戦地にむかい死んでしまうかもしれない水原さんのすずさんへ伝えたかった想いと、幼馴染みだからこそ伝えにくかったすずさんの水原さんへの想いと、周作さんへの愛が巧みな言葉で交差するように構成されています。お互いに相手のことを想い、大切に思っている気持ちが言葉にしてしまうと逆に伝わらない。でも、お別れを言うためにやって来た水原さんの気持ちは痛いほどわかり、それを周作さんも理解しているのがわかります。難しいシチュエーションなのに心温かく描かれた渾身の8ページだと思います。

23 話目

「愛国いろはかるた」のかたちをとって、当時の戦時中の国民精神と銃後の生活を描いてあります。付録的な演出です。

24 話目

すずさんの兄の要一さんの戦死が伝えられます。帰ってきた遺骨箱には骨ではなく、石がたったひとつだけ入ったものでした。そんなもので戦死が信じられるわけがありません。水原さんとの一件で夫婦げんかするシーンもあり、すずさんの主婦としての成長や妻としての愛がうかがえるところです。

25 話目

すずさんはリンドウの茶碗を、遊女の白木リンさんに返しに二葉館にやって来ます。リンさんには会えずに、風邪をひいていたテルさんに会います。幸せ薄い彼女たちのことが語られ、すずさんは絵を描いてテルさんを励まします。なにげなく描かれた8ページですが、ここには戦時下の兵隊たちの心情と、遊女たちのやさしさが描かれていて好きなシーンでもあります。そんな現実を知っていくすずさんと、同じ兵隊である水原さんへの想いも重なって見えてきます。

26 話目

何気ない春の息吹を感じさせる穏やかな日常。前半はまったくセリフなしで、春近い情景が語られますが、一転してアメリカ軍の艦上戦闘機グラマンによる攻撃が始まります。畑で恐怖に震えるすずさんと晴美さん、助けに来る周作さ

んの父親が描かれています。何気ない穏やかな日々潜む、死と隣り合わせの戦争の恐怖が見えてきます。

27 話目

晴美が1年生に入学ということで、学用品を調達にすすさんと径子さんは奔走します。しかし、教科書だけが手に入りません。そんな時に離婚して父方に置いてきた径子さんの長男、晴美さんの兄の久夫さんから教科書が届きます。

28 話目

戦時下なのに春には桜が満開となります。それだけに哀しい美しさです。北條家もお花見に出掛けますが、そこで白木リンさんに会います。すすさんはリンさんと一緒に桜の木に登り、あの風邪をひいていたテルさんが亡くなったこと知ります。

「人が死んだら記憶も消えて無くなる。秘密は無かったことになる。それはゼイタクな事かも知れんよ」

そんなリンさんの言葉をかみしめるすすさんです。

29 話目（下巻）

空襲警報のことや、その時の対応マニュアルが説明されています。この作品は物語の進行と同時に、当時の生活の様子や資料もわかりやすく絵によって説明されています。

30 話目

広島と呉の軍港としての歴史が教科書のように説明されています。呉鎮守府が置かれ、やがて鎮守府をトップに広工廠と呉工廠に別れます。第11航空廠が追加され細分化されていきます。多くの軍艦や戦闘機などが生産されたことがわかるページです。

31 話目

周作さんが海兵団へ行くことが決まります。すすさんは北條家を守るように頼まれます。軍事教練をうけるので3ヶ月は家に帰れないからです。

32 話目

周作さんの父親が怪我をして入院しているので、それを見舞いに行ったすずさんと晴美さんも、帰りに再び空襲に遭います。防空壕に逃げ込み助かりましたが、その後の帰り道で時限装置の爆弾に気づかず巻き込まれてしまいます。

33 話目

晴美さんは犠牲となり、すずさんは右手を失います。北條家で寝ているすずさんを後悔と苦悩が襲います。晴美さんを守れなかった心の痛みは、傷の痛み以上のものです。径子さんはそれを責めますがどうすることもできません。

34 話目

すずさんの傷も癒えないうちに大空襲が襲います。北條家の家にも焼夷弾が落ち、それを必死に消すことで家を守ろうとします。呉の町のほとんどが焼失してしまいます。駆けつけた周作さんに、

「友達なん、お願いします」

そうリンさんの安否を確かめてとお願いするすずさんです。

35 話目

熱も下がり元気になってきたすずさんにみんなは良かったと言いますが、それを素直に受け入れられないすずさんです。

「歪んだら」

自分を責めるすずさんです。妹のすみさんが見舞いに来ます。すみさんは広島に帰っておいでと、すずさんを誘います。

36 話目

庭にシラサギが舞い降ります。空襲警報の鳴る中で、すずさんはシラサギに山を越えて広島に逃げるように促します、自分に言うかのように。そこへグラマンの機銃掃射が迫ります。間一髪で周作さんに助けられるすずさんですが、自暴自棄になっており広島へ帰ると訴えます。

37 話目

すずさんが広島の実家へ帰る準備を径子さんが手伝っています。径子さんは晴美さんのことで責め立てたことを謝り、

「すずさんがイヤんならん限り、すずさんの居場所はここじゃ」

と、徑子さんはすずさんに言います。その直後、外が異常なほどの閃光で輝きます。

すずさんは北條家に残ることを決めます。

その時、父親に促され外に出て、広島方面の空を見上げたときに、そこには今まで見たことのないような雲が立ち上っていました。

38 話目

広島に投下された新型爆弾のことが話されます。いろいろな憶測がとぶなかで、広島へ駆けつけるグループが結成されますが、自分も実家が心配だというすずさんも髪を切り、連れて行ってくれるように懇願します。しかし、まだ傷も完全に癒えないすずさんは足手まといになるので、あきらめることになりません。

39 話目

終戦が伝えられます。のんびりしていて、ぼーとしているように言われるすずさんですが、敗戦に対して怒りを露わにします。自分たちがこんなにまでして頑張ってきたのはなんだったのか！

「この国から正義が飛び去っていく」

当時の多くの国民が、すずさんと同じように感じたことでしょう。

40 話目

大雨の夜の出来事です。焼夷弾で空いた屋根を修理したり、大雨の中を郵便が届いたり、父親が職場が解散したので鋏を造って持って帰ってきたり、雨の日の騒動というお話ですが、届いた郵便が妹のすみさんからのものだわかります。すみさんは助かっていたのです。

41 話目

周作さんを見送って壊された呉まで降りてくるすずさんですが、周作さんの計らいでリンさんのいた二葉館へ行くことができます。そこも空襲で建物もすべてが壊されていました。残骸の中にリンドウの茶碗の破片を見つけるすずさんです。

「死んだら秘密もなくなる、それはゼイタクなこと」

そんなリンさんのかつての言葉に

「リンさんと周作さんのこと、秘密でなくなった。それもゼイタクなこと」

と、すずさんは心の中で言います。

ここで重要なのは、リンさんの子どもの頃の様子や境遇が語られているところです。すずさんが草津の祖母の家で寝ていたとき出てきた座敷童が、実はリンさんだったことが明かされます。読み切りであった「大潮の頃」の物語とリンクしていることがわかります。

42 話目

すずさんと怪子さんが進駐軍たちもいるマーケットに行ってみると、時代が少しずつ動き始めていることを知ります。けっして戦後は苦しく辛いことばかりで弱音を吐くのではなく、まずは懸命に生き延びることが大切だと気づきます。

43 話目

軍艦が好きだった晴美さんのことを思い、軍港にいったすずさんはそこで、残骸となった軍艦の前でたたずむ水原さんを見かけます。しかし声をかけることなく立ち去ります。亡くなった人や消えてしまったものに想いを寄せることが、生き残った者の役割かもしれないとすずさんは思います。

「記憶の器になる」

ことを決意します。

44 話目

すずさんは祖母のいる草津にいる妹のすみさんを訪ねます。被爆して寝ている妹を励ますのです。広島市内で周作さんと合流しますが、多くの人たちが誰かを捜してこの町を歩いていることを知ります。身内や知り合いが犠牲になっていて、それでもどこかで生きているのではと、いまだに探し続ける人たちを知ります。

子どもの頃に、人買いに捕まり一緒に駕籠に入れられた縁が始まりのすずさんと周作さん（「冬の記憶」参照）。その人買いが廃墟の町を歩いているのをふたりは見かけます。

「この世界の片隅に、うちを見つけてくれてありがとう、周作さん」

この物語のテーマがすずさんの口から語られます。

ここには3編の連続したショートストーリーがギャグマンガとして挿入されています。戦死した要一兄さんが生き残っていて、南の島でワニと結婚して、人買いになって日本に帰ってきている、そんなファンタジーっぽい3編が楽しく描かれています。

45 話目（最終話）

手紙形式で描かれた最終話です。被爆して母を亡くした戦災孤児が、すずさんと周作さんと偶然出会い、腕を亡くした母親と重なってすずさんになつくその子を、そのまま北條家に連れて帰ります。養女として子どものいないふたりはその子を育てる決意をします。この孤児と出会ったのも、この世界の片隅で起こった奇跡であるわけです。すずさん、周作さんにこれからの人生にエールを贈りたくなるエンディングです。

全体で48話ある「この世界の片隅に」という漫画作品ですが、1つの話は基本8ページ、多くても10から12ページとなっています。これはストーリー漫画としては珍しくページ数が少ないといえます。通常、読み切り漫画で30ページ前後、連載漫画で16ページ平均、8ページというのはどちらかというとギャグ漫画に多いページ数となります。スクリーントーンを使わず、すべてペン画のように描き込んである描き方では、作画的には8ページが適当だったのかもしれない。しかし、技術的なことではなく短編を集めた形式になっているのは、第4話の45話からなる連載版が、テンポある物語の展開をキープするために、レスポンスの良さから8ページでの連載を選択したのではとも思えるのです。上記の各話の内容を見ていくと、あたかも日記帳をめくるように、または絵日記を並べたように描かれていることに気づきます。

わたしたちはこの話を読み進めていくうちに、時系列に沿ったすずさんの日々の生活を追体験している気持ちになるのです。なぜかというと、読者の多くは戦争知らない世代であるわけです。

話がそれますが、みなさんは「ファンタジー」とはどのようなジャンルの作品だと思われますか？「ハリーポッター・シリーズ」「ロード・オブ・ザ・リング」、アニメーションだとスタジオジブリ作品に代表される「風の谷のナウシカ」「千と千尋の神隠し」や「もののけ姫」でしょうか？

ファンタジーに代表される#タグは「王様」「女王」「王国」「魔法」「悪霊」「あやかし」「妖怪」「終末」「インパクト」「モンスター」「ハンター」「刀剣」「剣士」などなど、きりがありませんが、現実の中の不可思議な世界観や、架空の国や世界、未来の地球の姿や人々、妖怪やモンスターの棲む森や荒れ野、荒廃した終末戦争後の地球、など平行世界や宇宙といった我々の想像力や空想力の上に成り立つ、それは世界観であるように思われます。事実、そのような世界に身をゆだねることは現実逃避ができて、楽しい時間でもあります。日頃のしがらみやストレスから解放される一瞬でもあります。それ故にファンタジーは漫画やアニメーション、映画やもちろん小説など、多くのメディアで楽しめるジャンルでもあります。

ところが最近、編集部などで語られるファンタジーの解釈の仕方が変わりつつあります。実際に起こった歴史的事実も、つまりノンフィクションとしてのエピソードも、ファンタジーと呼ぶことが多くなってきているのです。つまりは、戦争を知らない世代から見れば「この世界の片隅に」で描かれる世界はファンタジーなのです。戦争体験や戦時中のエピソードをファンタジーと呼ぶには、抵抗があるかもしれませんが、読者には想像するしかない世界なのです。

話がそれてしまいましたが、この作品の特異な部分は昭和9年から昭和21年までのすずさんの歩んだ日々を読みながら、日記を紐解くように現実的な毎日を主観的に漫画の中で体験すると同時に、過ぎてしまった時間の自分たちの知らない世界をファンタジーとして客観的に楽しんでいる、そんな感情が同時に存在していて、読者と付かず離れずの距離感をもって描かれている点にあるように思われるのです。そしてそれは、漫画というメディアがもっとも得意とする表現方法であり、作家の力量が試されるジャンルでもあるのです。

最後にテレビで放映されたドラマ版について説明します。

日曜劇場「この世界の片隅に」は、2018年7月15日から9月16日までの9回で放送されました。21:00から21:54までCMを含む54分の放送時間となっています。日曜劇場らしい丁寧な、ゆったりとした作品づくりとなっています。軽佻浮薄なドラマが多い昨今、日曜劇場はいつも軸足をしっかり置いたドラマづくりがされていると感じました。

初回を観て、まず感じたのはキャスティングの上手さでした。脚本の岡田恵和さんは「ちゅらさん」や「ひよっこ」などNHKの朝ドラでも有名なヒットメーカーですので、岡田さんの意見がキャスティングに反映されているとすれば、納得できるところがたくさんあります。主人公の北條すずの役の松本穂香さんをはじめ、伊藤沙莉さん、宮本信子さん、古舘佑太朗さん、など「ひよっこ」メンバーがそろっていました。すず役の松本さんも、のんびりしたすずさんのキャラクターにぴったりで、可愛いけれども素朴な田舎娘らしさも表現されていました。また、北條周作役の松阪桃李さんの真面目で誠実なイメージもプラスされて、作品の中心となるこのふたりが戦時下とは言え、ほのぼのとした雰囲気シリーズの最初の頃はうまく醸し出していたと感じました。

戦争が激化するに従って、生活は苦しくなり、空襲やそれによる犠牲者も出てきますが、困窮した生活であるのにも関わらず、懸命に普段通りに暮らそうとする姿も原作どおりに描かれていました。当然、ラストへ向かって戦時中より辛い終戦後の様子も、その戦争後の悲惨な生活状況をちゃんとセットやCGで見せながら、しかしもっとも重要なテーマである「生き残った自分たちの暮らし」を見つめていくことも描かれていました。素晴らしい構成演出だと感じました。

方言も読む漫画と少し違って、耳から入ってくる広島弁はこれはこれで心地よく、役者さんたちが苦労されて演じられた成果が出ていました。

漫画版原作では419ページの物語ですが、それを実に忠実に描かれてありました。劇場版「この世界の片隅に」はアニメーションだけに、作画も漫画版に近く違和感なく入り込める利点はありますが、なにしろ2時間程度に419ペー

ジをまとめるのはかなり難航したのではないかと推察されます。実際にカットされたエピソードも多く、主題がぶれないようにするために絞り込んだ演出は、片渕素直監督の力業のように感じたのも事実です。要約したあらすじを観ている感じはありましたが、あくまでも漫画原作を見た人にとっての感想なので、実際にアニメーション版が初めての人には、充分楽しめて、考えさせられる作品であるのには違いありません。

その点、TBS版は初回が1時間9分、2回目が1時間、のこり7回が46分、つまり約450分。漫画版の419ページを充分な余裕をもってドラマ化できる時間だとわかります。

キャスティングだけではなく、時代考証の丁寧さもドラマのリアリティと臨場感をたかめるのに効果をあげています。日曜劇場がTBSの看板番組の一つだとしても、潤沢に予算があるわけではないでしょうから、その中で漫画版が当時の様子を丹念に調べ研究されて描いてあるだけに、古民家を移築してのオープンセットや、当時の生活の小道具など再現されてあることは見事でした。それらがドラマに臨場感を与えているは確かです。現存する建物や露地を利用して撮影や、当時をCGで再現したりとか、漫画版に極めて近い背景になっています。

漫画版やアニメーション版との差別化が必要だったのか、現代の広島や呉のシーンが挿入されているのは不満が残ります。違和感がありすぎました。

実は周作さんとすずさんが広島で出会う少女「節子」（アニメーション版では「千鶴」）を養女にして、節子が現代まで生きている設定として、過去と現代＝戦争と平和、のあり方を伝えつなげるキーパーソンとなっていることは理解できます。また、片渕素直監督の「すずさんが生きていれば元気でカーブ女子でもやってるでしょう！」というコメントがあり、すずさんらしき人が後ろ姿でカーブを応援しているラストシーンとなったことも推測できます。しかし、やはり物語の流れが止まってしまったのは残念でした。後日DVDやBDで発売されるようです。

順番とすれば、当然漫画原作版を読み、アニメーション版を鑑賞し、機会があればドラマ版を観ることで、深く「この世界の片隅に」のテーマをより理解することができるのではと信じています。

おわり